

岡部遊志(帝京大学経済学部助教)

フランスにおける
航空宇宙産業クラスターと地域間連携
—ミディ・ピレネー地域圏を事例として—

経済地理学年報 Vol.61 No.2
pp.101~120 2015.6.

本論文は、フランスのクラスター政策である「競争力の極」について、航空宇宙産業を核とするミディ・ピレネー地域圏を事例として論じたものである。本研究は航空宇宙産業の先進地域であるフランスのトゥールーズを中心としたクラスターを取り上げ、その構造を検討したものであり、興味深い視座であるといえる。

まず、「I. はじめに」では、1980年代から進められたフランスの分権改革の中で地域圏が設定され、地域政策の中で国際競争力を進めてきたとし、その中でクラスター政策である「競争力の極」政策が出てきたと位置付けている。その上で、多層的な政府間関係を明らかにするためには地方圏が望ましいとして、低成長地域であるフランス南西部を調査対象として取り上げる必要性を指摘している。

「II. ミディ・ピレネー地域圏と航空宇宙産業」では、ミディ・ピレネー地域圏の概要を説明した上で、人口と一人当たりGDPの伸び率はフランス国内でも上位であるとする。当該地域の産業構成は農業が盛んであるものの、航空宇宙産業を中心として輸送用機械の伸びを指摘する。特に中心都市のトゥールーズは軍事産業の疎開と実業家ラテコエールによる軍用機製造によって、航空機産業が立地したと分析している。そのためミディ・ピレネー地域圏は外部移植により航空宇宙産業が集積し、それはトゥー

ルーズ都市圏に一極集中しており、地域構成としてはエアバスが立地する北西部とICT集積の南東部に立地が分化していることを明らかにしている。

「III. ミディ・ピレネー地域圏における競争力の極『アエロスペース・ヴァレー』」では、ミディ・ピレネー地域圏で民間航空機を中核とするエアバスを中心としたヒエラルキー型の企業間関係が成立していたため、大企業主導で「競争力の極」政策に参加したとする。加えて西隣にあるアキテーヌ地域圏でもダッソーを核とした軍用機生産の集積があり、中央政府は両者を合わせて「アエロスペース・ヴァレー」に指定したとしている。この極には航空機メーカー、一次サプライヤー、中小企業、教育・研究機関、自治体、産業支援機関が参加している。

「IV. アエロスペース・ヴァレーのビジネス戦略分野と広域連携」では、同クラスターの参加主体の名簿からデータベースを作成し、戦略分野の9つの分野を考察している。なお戦略分野は、①「装置、機械化、推進、エネルギー、宇宙への到達」、②「メカニクス、材料、構造」、③「一般的なエンジニアリングと共同生産」、④「メンテナンスとサービス」、⑤「生きている地球と宇宙」、⑥「ナビゲーション、位置測定、通信」、⑦「搭載システム」、⑧「空の安全・安心」、⑨「自律システム」である。ここで戦略分野ごとの参加主体の立地分析がなされ、参加主体が当該地域に立地していても支援は多様で広域な自治体であることが示されている。

「V. おわりに」では、クラスター政策の成果として、中央政府の影響があるものの地域圏の関係強化がなされ、イノベーションの基礎も構築されたと主張している。

最後に若干のコメントをしておきたい。本論

文はタイトルから航空宇宙産業に関する研究のように考えられるが、実際には航空宇宙産業を中核とするクラスターの地域内構造と地域間連携に関する事例研究であり、航空宇宙産業クラスターの空間構造を正面から扱った研究ではなかった。その点でフランスにおける航空宇宙産業クラスターに関する産業地理学的な意味での地域構成の解明という課題が残されており、今後の研究に期待される。

(山形大学人文学部准教授 山本匡毅)